

# 文学のすゝめ

福田 泰久

## はじめに

終戦直後のまだ教科書など揃わない時代に、当時 15 歳の渡部昇一はかつて副読本として使われていたシェイクスピアの『リア王』のリトールド物を旧制鶴岡中学の授業で読んだと、自叙伝のなかで回顧している。(118-20) しかも、新制の鶴岡第一高校三年次になってようやく配布されるようになった教科書にはフランシス・ベーコンの『エッセイ』やジョン・ロックの『人間悟性論』が読み物として載り、それを *C.O.D. (The Concise Oxford Dictionary)* を引きながら読んだというから驚きだ。(158) 上智大学の英文科に進学して以降の記述にも(人)文学を素材とした教科書の紹介は続き、コミュニケーション全盛の昨今の英語教育からすると隔世の感を禁じ得ない。

日本の英語教育はいつから文学を捨てコミュニケーション重視の方向に転じたのか、そして文学の復権はもう望めないのだろうか。小論では文学作品を素材とした教材が英語教育から姿を消しつつある背景をたどるとともに、現在の英語教育における文学教材の可能性を探ることを目的とする。

## 1. (人) 文学教材の歴史

英語教科書<sup>1</sup>における(人)文学教材の盛衰の確認から始めよう。近代化を急ぐ明治期の日本では、「文学作品の訳読は西洋人のものの方や風物を知るための「実用的」方法」(江利川(2009)75)だったため、当時の教科書や副読本には正典作家や通俗作家の名が躍った。英語教授研究所(現、一般財団法人語学教育研究所)がまとめた「高等学校使用教科書一覧」の1930年までのデータでは、トマス・ハーディとコナン・ドイルが同数で首位を分け合い、次いでチャールズ・ディケンズ、ウィリアム・シェイクスピア(チ

ャールズ・ラム含む)と続き、総数の7割を文学作品が占めた。(ibid. 76)

戦争の足音が聞こえ始める1930年代後半になると、一転、「語学の「實際化」が叫ばれ、科学技術ものや政治・経済・外交などの時事もの」(ibid. 77)が増加したが、戦後、再び文学作品がもてはやされ、70年代あたりまでは旧制中学時代と変わらず、チャールズ・ラム、ジェイムズ・ボールドウィン、ナサニエル・ホーソーン、イソップ童話等が高等学校の副読本に登場した。さらに80年代以降になると、サマセット・モームや20世紀のアメリカ作家、アースキン・コールドウェル、アーネスト・ヘミングウェイ、ウィリアム・サローヤン等が教科書に顔を出すようになる。(ibid. 80-81)

このように整理すると80年代に入っても未だ学校現場では文学素材がもてはやされていたかのような錯覚に陥るが、足元では着実に変化が訪れていた。1951(昭和26)年の中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編(試案)改訂版では、高等学校英語教育の目標として「英語で書かれた標準的な現代文学の作品を読んで鑑賞できるようになること」<sup>2</sup>を謳っている。だが、5年後の1956(昭和31)年の高等学校学習指導要領外国語科編改訂版では、「作品については具体例は示さないが(...)英語を常用語としている人々の生活、風俗、習慣、思想感情、その国の地理、歴史、制度など、題材内容に変化をもたせるとともに、特に文学的のもの(...)などに片寄らないようにする」<sup>3</sup>旨が謳われ、文学偏重の時流に釘を刺している。

題材形式に目を転じると、1970(昭和45)年の高等学校学習指導要領・外国語では、「説明文、対話文、物語、伝記、小説、劇、詩、随筆、論文、日記、手紙、時事文など」<sup>4</sup>としているが、1978(昭和53)年の同指導要領では「説明文、対話文、物語形式、劇形式」<sup>5</sup>となり、伝記、詩、随筆、論文、日記、手紙、時事文が省略されていることがわかる。78年、89年、99年、09年の高等学校学習指導要領における題材形式の説明語句の経時変化を調査した高橋によれば、99年版から題材形式に加え、言語の使用場面の例と言語の働きの例が新たに示され、09年版では題材形式が消え、両例が目立つ形で提示され始めたという。(18)コミュニケーション能力の育成に主眼を置いた英語教育への「決定的な転換」が図られた時期を、江利川(2007)は「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」<sup>6</sup>の育成を目標に

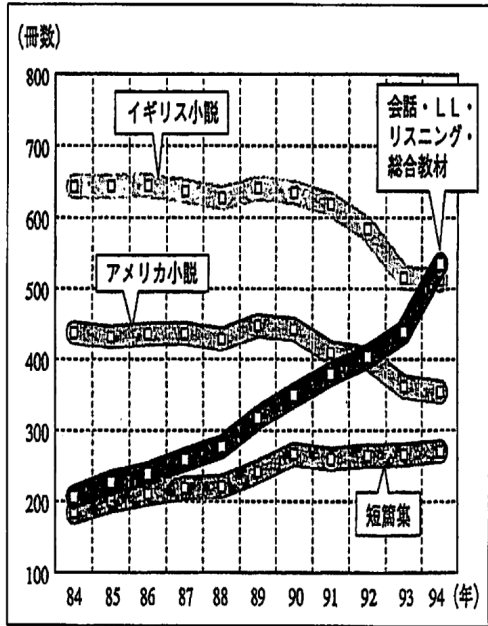
明記した 89 年版の中学校・高等学校学習指導要領に求めているが、(11-12) いずれにしても、(人) 文学素材を中心とした教材からコミュニケーション能力育成を主眼におく教材への転換は、80 年代から 90 年代かけて推し進められたと考えてよいだろう。

それでは大学の状況はどうか。大学には学習指導要領の類はなく、検定教科書もない。といってもそれは教科書選択や教育内容がすべて授業担当者の裁量に任されていることを意味しない。80 年代の規制緩和の流れを受け、大学設置基準の大綱化が行われたのが 1991 (平成 3) 年のことである。大綱化以降、一般教育科目や外国語科目等の教育科目の区分が取り払われたことに起因する一般教育科目の削減に伴い、全国の大学で教養部が廃止されたこと、そして学位規則の改正により全国の大学で環境、国際、情報等の名称を冠した学部学科が乱立するなかで、「コミュニケーション」を看板に掲げる学部学科<sup>7</sup> が登場し始めたこと等記憶に新しい大学関係者は多いだろう。

加えて、コミュニケーションへの転換点として江利川 (2009) が指摘するのは、2003 (平成 15) 年に文部科学省が策定した「英語が使える日本人」の育成のための行動計画<sup>8</sup> である。(84) その冒頭、国民全員に求められる英語力として「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」こと、そして専門分野に必要な英語力や国際社会に活躍する人材等に求められる英語力として「大学を卒業したら仕事で英語が使える」ことを、日本人に求められる英語力として掲げている。中学校・高等学校では英語力の目安としてそれぞれ英検 3 級と英検準 2 から 2 級程度が示されているが、高等教育の場合は「各大学が、仕事で英語を使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」するよう求めるに留めている。一見、各大学の裁量に任されているようだが、その実「基礎的・実践的なコミュニケーション能力を身に付ける」とともに、「英検、TOEFL、TOEIC 等客観的指標に基づいて世界平均水準の英語力を目指すことが重要」であると但し書きがついていることから、暗に各大学に求めるものが透けている。

高等教育機関では 90 年代から 00 年代にかけてコミュニケーション能力育成への転換が図られたが、それでは教科書・テキストに変化は見られたのであろうか。

高橋も取り上げているが、右のグラフは、大学英語教科書協会所属の各出版社が 1984 年から 94 年にかけて出版した教科書の冊数の推移を示したものである。  
(49)



江利川が「決定的な転換」とした学習指導要領が示されたのが 89 年だが、80 年代後半から会話・LL・リスニング・総合教材が急激な伸びを示す一方で、91 年の大綱化以降、短編集を除いて英米の小説は著しく冊数を落としている。

(図 1 「目でみる英語教育」)

大学教科書協会の 2004 年度の新刊書をカテゴリ別に検索した江利川 (2009) にならい、(83) 高橋は 2009 年度の新刊書の点数をカテゴリ別に集計している。

2009 年度<sup>9</sup>

カテゴリ	2009 年度用大学英語教科書数	
	全書籍	内、新刊
イギリス小説・物語	192	0
アメリカ小説・物語	164	0
イギリス小説選集	95	0

アメリカ小説選集	137	0
英語圏小説選集	41	0
イギリス詩歌・戯曲	159	0
アメリカ詩歌・戯曲	69	0
英会話	174	9
LL／リスニング	464	27
コミュニケーション	180	6
TOEIC／TOEFL	243	21

10年後の2019年度の調査結果は以下の通りである。カテゴリは高橋が抽出したものに揃えている。

#### 2019年度<sup>10</sup>

カテゴリ	2019年度用大学英語教科書数	
	全書籍	内、新刊
イギリス小説・物語	167	1
アメリカ小説・物語	145	0
イギリス小説選集	91	0
アメリカ小説選集	129	0
英語圏小説選集	45	1
イギリス詩歌・戯曲	132	0
アメリカ詩歌・戯曲	66	0
英会話	217	10
LL／リスニング	565	9
コミュニケーション	270	11
TOEIC／TOEFL	386	18

10年間の推移から、英語圏小説選集を除いて、小説、物語、詩歌・戯曲関連の全書籍数がいずれも減少していることがわかる。これは出版されていない

だけでなく、絶版となり取り扱いのなくなった書籍の存在を示している。ちなみに英語圏小説選集のうち 2019 年度の新刊は南雲堂の『大学生が読むべき世界の短編 30』だが、タイトルからも知れるように必ずしも英米の括りではないため、単純に書籍数の増加を喜ぶことはできない。また、2019 年にはイギリス小説・物語のカテゴリで新刊が 1 冊（英宝社の『ドラキュラ リトールド版』）出ているが、オーセンティック<sup>11</sup> 素材ではないリトールド物で、かつオーラル・コミュニケーションのアクティビティを備えた総合教材であり、カテゴリ分けにいささか不安が残る。その一方で、表の英会話以下のカテゴリの書籍数は順調に数を伸ばしている。例えば、図 1 の会話・LL・リスニング・総合教材の 1989 年時点の総冊数と比較すると、その興隆ぶりは顕著である。現在のカテゴリとは異なるが、Appendix を参照しながら各カテゴリの現在の全書籍数をカウントすると（英）会話 345、LL・リスニング 565、総合教材 1359 となり、計 2269 冊である。30 年前の 1989 年時点の同カテゴリの総冊数が 300（図 1 参照）を少し超えたあたりであることから、およそ 7 倍の増加をみていることになる。

こうした傾向は、昨今の入試改革をめぐる 4 技能の「人気ぶり」にもうかがえるように、今後も継続していく（そして文学の凋落もまた継続していく）ことが予想される。そうした現状を踏まえ、次節では英語教育における文学教材の可能性を探りたい。

## 2. 文学のすゝめ？

大学英語教科書における文学素材の凋落は顕著である。とはいえ英米文学者はこうした状況をただ指をくわえて見ていたわけではない。2017 年、日本英文学会関東支部のメンバーが中心となり、研究社から『教室の英文学』が上梓され、当時日本英文学会会長の佐々木徹と日本アメリカ文学会会長の巽孝之が巻頭言を寄せている。興味深いのはいずれも精読の重要性を説くことで、つまり精緻に物語を読み解くことでしか生じえないおもしろさを学生と共有することで、文学は再び英語教育のなかに確かな地歩を占めることができると述べていることである。

例えば、「英語教育の文脈の中でしきりにコミュニケーション能力が云々さ

れるが、そもそもコミュニケーションとは人間同士のつながりの問題である。

(...) そのつながりを強める力が「人間力」であり、文学はまさにこれを涵養する」(2) と語る佐々木は、ヘンリー・ジェームズを引き合いに出しながら、「おもしろさ」こそがその文学の原点であるという。そして、文学のおもしろさは「ことば」にあり、それを精確に読み解くことで、すなわち人間力を涵養する文学の力を精読によって涵養することで、もってコミュニケーションに資するのだと、(オーラル) コミュニケーション全盛の英語教育に苦言を呈する。

他方、巽は精読という言葉が新批評でいう“close reading”と必ずしも対応するものではないということから話を始める。「精読」は中国の経書を読み解くのに培われた訓詁学伝統に則った注釈、すなわち「言葉への起源へ遡行する学問的作業」であるのに対し、“close reading”は「外部を一切遮断したうえで言葉の機能をあぶり出し「テキストの可能性を開いていく批評的解釈」だという。そして、「精読」と“close reading”の交差する瞬間、「学問的探究と批評的解釈が交差する瞬間」(10) こそが、今、(大学で教える) 文学に求められているのだとする。

ちなみに教授材料としての文学（及び、その読みの方法論としての精読）については、ここ数年の入試の4技能をめぐる議論のなかで度々言及される、ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference: CEFR）のなかでも言及されている。

Reading	C2	Self-assessment grid: <sup>12</sup> I can read with ease virtually all forms of the written language, including abstract, structurally or linguistically complex texts such as manuals, specialized articles and <u>literary works</u>  Overall reading comprehension: <sup>13</sup> Can understand and interpret critically virtually all forms of the written language including <u>abstract</u> ,
---------	----	--

		<u>structurally complex, or highly colloquial literary and non-literary writings. (...).</u>
	C1	Self-assessment grid: <u>I can understand long and complex factual and literary texts, appreciating distinctions of style. (...).</u>  Overall reading comprehension: Can understand in detail lengthy, complex texts, whether or not they relate to his/her own area of speciality, provided he/she can reread difficult sections.
	B2	Self-assessment grid: (...). <u>I can understand contemporary literary prose.</u>

(下線は筆者)

CEFR の指標で文学に関する言及のある箇所を上 に抜粋したが、CEFR では文学素材を用いるのは B2 以上のレベルに限定され、文学を教授困難な素材とみなしていることがうかがえる。幼稚園から高等学校卒業までを対象とするアメリカの各州共通基礎スタンダード (Common Core State Standards: CCSS) と CEFR を比較することでなぜ文学が教授素材として不人気なのかを考察する伊藤も指摘するように、CCSS は逆にレベルが上がるごとに文学への言及が少なくなることを踏まえると、CEFR と CCSS とでは文学の読み の方法論が決定的に異なっていることがわかる。(235) つまり、CCSS では多読に読みの方法を限定しているのに対し、CEFR では精読が想定されているのである。(235)

したがって、あけすけに言えば、イギリス文学とアメリカ文学の日本における「親学会」とでも言うべき学会の両会長の提言は、日本で上位層の大学を本務校とすることで初めて可能となる類のものだろう。昔ながらの精読を授業で破綻することなく行える高等教育機関においては、精読であろうが多読であろうが、そもそもどのような教授法を採るにしても学生はある程度内容を理解できるであろうし、授業にコミットしてくると思われるからである。



高橋も指摘するように、そもそも精読は「多彩な活動を行いにくい点、文字中心で音声面の学習が行いにくい点、重点的に学ぶ言語材料を学習者自らが気づきにくい点、教師から学習者への一方的な授業展開を生みやすい点」(195)等が問題点として挙げられる。そのため、中位下位の多くの大学が文学を素材として授業（それも1、2年生用の教養科目）で扱おうと思えば、必然的にグレイデッド・リーダーズ等の多読素材を採用せざるを得ないと思われる。

1 節の最後で『ドラキュラ リトルド版』をオーセンティック素材ではない旨を指摘したが、多読の検討に入る前に、オーセンティックの意味を今一度確認しておこう。オーセンティック（素材）とは、「言語教育において、例えば雑誌、新聞、広告、ニュースレポート、歌等のように、教育目的のために元々開発されたものではない素材」(42) のことで、そうした素材には、「実際ので自然な言語の使用例を含んでいると考えられ」(42) ている。この観点で言えば、文学作品も教育目的で執筆されたものではないため、オーセンティック素材となる。それでは多読のようなリトルド物、編者の手が加えられたものはどうだろうか。そこでオーセンティックな文学作品とそうでない文学作品を腑分けするために、Miall and Kuiken による“Literariness”「文学性」の概念を補助線として引いてみよう。

Miall and Kuiken によれば「文学性」は次の3点から構成される。1 点目は、“[...] the occurrence of stylistic variations that are distinctively (although not uniquely) associated with literary texts: in this case, metaphor [...] and archaic, polysemous noun [...].” (122)、2 点目は“the occurrence of this type of defamiliarization” (123)、そして3 点目が“the modification or transformation of a conventional feeling or concept” (123) である。言い換えれば、文学性とは「文体論的差異ないし語りの差異が通例理解されている指示対象を異化することで、従来の感情や概念を再解釈する変更・変化を促す」(123) ときに構成されるものである。それでは、この概念を踏まえて、『ドラキュラ』の原作とリトルド物を比較してみよう。

事務弁護士のジョナサン・ハーカーがルーマニアに住むドラキュラ伯爵からロンドンの地所を購入したい旨の連絡を受け、手続きのためにはるばるカ

ルパティア山脈を越えルーマニアに向かう場面から物語は始まる。『ドラキュラ』は書簡体小説なのだが、その冒頭部分 5 月 5 日のハーカーの手紙には次のような記述がある。

“There is no carriage here. The Herr is not expected after all. He will now come on to Bukovina, and return to-morrow or the next day; better the next day.” Whilst he was speaking the horses began to neigh and snort and plunge wildly, so that the driver had to hold them up. Then, amongst a chorus of screams from the peasants and a universal crossing of themselves, a calèche, with four horses, drove up behind us, overtook us, and drew up beside the coach. I could see from the flash of our lamps, as the rays fell on them, that the horses were coal-black and splendid animals. They were driven by a tall man, with a long brown beard and a great black hat, which seemed to hide his face from us. I could only see the gleam of a pair of very bright eyes, which seemed red in the lamplight, as he turned to us. He said to the driver:—

“You are early to-night, my friend.” The man stammered in reply:—

“The English Herr was in a hurry,” to which the stranger replied:—

“That is why, I suppose, you wished him to go on to Bukovina. You cannot deceive me, my friend; I know too much, and my horses are swift.” As he spoke he smiled, and the lamplight fell on a hard-looking mouth, with very red lips and sharp-looking teeth, as white as ivory. One of my companions whispered to another the line from Burger’s “Lenore”:—

“Denn die Todten reiten schnell”—

(“For the dead travel fast.”)

The strange driver evidently heard the words, for he looked up with a gleaming smile. (*Dracula* 1897. 2002. 35-36)

同一箇所をリトールド物から引用する。

“You see, there is no coach waiting for you. Why don't you go to Bukovina for tonight and come back a few days later?”

As soon as he said this, the horses became excited and the passengers screamed and crossed themselves. Then a coach with four beautiful horses came along. Its driver was a tall man with a long beard. His eyes were glittering in the lamplight.

He said to our driver, “You are early tonight. I heard you telling the English gentleman to go to Bukovina.” I wondered how he had heard the driver saying it. One of the passengers whispered, “The dead travel fast.” The tall driver sneered. (*Dracula* re-told. 2019. 7)

引用部分のポイントは「死人は旅が速い」(the dead travel fast)である。死人はふつつ動かない。そのためここでは常識が揺さぶられることで異化効果が生み出され、従来持っている死人の概念に変更がもたらされる。原作には言及があるが、このフレーズは 18 世紀のドイツの詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーの「レノーレ」からの引用である。恋人ウィリアムを戦争に送り出したレノーレは、一日千秋の思いで恋人の帰りを待っている。ある晩、どこかウィリアムの面影のある人物がレノーレのもとを訪ね、夫婦の契りを交わしレノーレを馬に乗せる。その馬は驚くほど飛ばし続ける。なぜそんなに急ぐのかをレノーレが尋ねたときのウィリアムの返答が、「死人は旅が速い」というものである。馬は墓地へ到着すると、ウィリアムと思われた人物はふっと消えてしまう。結婚初夜の床は、実はウィリアム本人の亡骸が横たわる死の床だったのである。精読であればこうした文化背景(ビュルガーがイギリスでも人気作家であったこと、「レノーレ」が吸血鬼文学に影響を及ぼしたこと)等にも言及できるだろう。多読にはそうした文化背景を駆使した読みや「論理的思考力の伸長」(高橋 195)が精読ほど望まれているわけではないが、上で確認したように、少なくとも「文学性」の一端を確認することはできる。そのため、リトールド物であっても、オーセンティック

な素材の要件を一定程度満たしていると考えられるだろう。

にもかかわらず、オーセンティック素材であるはずの文学は英語教育から除外されてきた。なぜか。それは高橋が適切に指摘するように、日本の英語教育がオーセンティックを限定的な意味に解釈し、教材を絞ってきたからである。転換点は 1 節でも紹介した 1980 年代、英語教育がコミュニケーションへと舵を切ったあたりである。論者によって定義はまちまちだが、オーセンティックの限定的な意味合いとして、「生の英語」、「生きた英語」、「ありのままの英語」を学ぶために「より日常的で具体的な題材を教材化したもの」（高橋 78）とし、日本の英語教育では多くの場合、この狭義のオーセンティック素材をオーセンティックだとみなしたという。こうした定義では文学が敬遠されるのは必然であろう。だが、上で見たように、原作には及ばないもののリトルド物にも本来の意味でのオーセンティックを、すなわち「文学性」を確認することはできる。しかも、先に紹介した『ドラキュラ リトルド版』は単なるリーディング教材ではなく、英作文、オーラル・コミュニケーション、リスニング等にも対応した総合教材である。こうした点を踏まえると、文学作品の多読・リトルド物の総合教材は、英語教育に文学を再び呼び戻すために好適の素材だと言えるのではないだろうか。

## 注

- 1 本稿では、主として高等学校と高等教育機関における英語教科書を扱う。
- 2 「学習指導要領データベース 昭和 26 年度中学校・高等学校学習指導要領外国語科英語編（試案）改訂版」 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s26jhl1/jp-chap1.htm>> 国立教育政策研究所（最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日）
- 3 「学習指導要領データベース 昭和 31 年度高等学校学習指導要領外国語科編改訂版」 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s31hl/chap3.htm>> 国立教育政策研究所（最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日）
- 4 「学習指導要領データベース 昭和 45 年度高等学校学習指導要領」 <<https://www.nier.go.jp/guideline/s45h/chap2-7.htm>> 国立教育政策研究所

(最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日)

- 5 「学習指導要領データベース 昭和 53 年度高等学校学習指導要領」  
<<https://www.nier.go.jp/guideline/s53h/chap2-18.htm>> 国立教育政策研究所  
(最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日)
- 6 「学習指導要領データベース 平成元年度高等学校学習指導要領」  
<<https://www.nier.go.jp/guideline/h01h/chap2-8.htm>> 国立教育政策研究所  
(最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日)
- 7 日本初のコミュニケーション系学部として、1995 年に東京経済大学コミュニケーション学部が開設されている。これ以降のコミュニケーション関連の学部学科の興隆については、高橋 302-03 を参照。
- 8 「「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」 <[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry0/04031601/005.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siry0/04031601/005.pdf)>  
文部科学省 (最終閲覧日 2020 年 1 月 22 日)
- 9 高橋 50 を参照。
- 10 ここに取り上げた 11 カテゴリを含むそれ以外のカテゴリについては末尾に添えた Appendix を参照されたい。
- 11 本稿ではオーセンティック (素材) を *Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics* の定義、“in language teaching, the use of materials that were not originally developed for pedagogical purposes, such as the use of magazines, newspapers, advertisement, news reports, or songs. Such materials are often thought to contain more realistic and natural examples of language use than those found in textbooks and other specially developed teaching materials” (42) で用いる。
- 12 Council for Cultural Co-operation Education Committee Modern Language Division 27 より抜粋。C1、B2 についても同様。
- 13 Council for Cultural Co-operation Education Committee Modern Language Division 69 より抜粋。C1 についても同様。

## Appendix

カテゴリ別大学英語教科書の出版点数

カテゴリ名	2009 年度		2019 年度	
	全書籍数	内、新刊数	全書籍数	内、新刊数
総合教材	864	65	1359	36
論説・随筆	518	10	519	3
コミュニケーション	180	6	270	11
英会話	174	9	345	19
時事英語	171	21	510	19
リーディングスキル	296	37	510	14
速読	71	4	97	0
英作文	276	8	342	10
LL／リスニング	202	8	565	9
ディベート	464	27	69	6
ボキャブラリー	53	4	93	1
単語集・熟語集	11	3	37	1
ビデオ教材	137	4	177	8
DVD 教材	14	8	130	13
CD-ROM ブック	20	2	21	0
英語検定	37	1	53	0
TOEIC／TOEFL	243	21	386	18
地球環境	93	4	123	5
科学読物	141	5	177	9
コンピュータ英語	8	2	10	0
医学健康・看護・福祉	83	6	137	7
ビジネス英語・秘書英語	47	5	85	3
経済英語	51	3	65	2
貿易英語	20	1	19	0

工業英語	20	0	38	4
社会問題	30	10	179	10
芸術／文明	73	0	87	2
思想／宗教	70	0	64	0
歴史	112	3	124	4
教育論／人生論	63	2	71	2
比較文化	239	6	256	6
日本文化論	86	5	116	2
イギリス事情	129	5	155	2
アメリカ事情	229	10	266	5
アメリカ研究	30	0	32	1
女性論	19	0	25	3
服飾／食文化	24	0	35	0
観光英語	41	2	66	2
ソング	21	1	29	1
映画	90	2	115	5
イギリス小説・物語	192	0	167	2
イギリス詩歌・戯曲	159	0	132	0
アメリカ小説・物語	164	0	145	0
アメリカ詩歌・戯曲	69	0	66	0
イギリス小説選集	95	0	91	0
アメリカ小説選集	137	0	129	0
英米文学史	57	0	49	1
文学論	44	0	35	1
英語圏小説選集	41	0	45	1
児童文学	48	0	45	1
民話・神話	48	0	42	0
SF・推理	36	33	29	1
聖書	16	12	10	0

伝記	67	1	49	0
英語史	26	1	25	0
英語学	53	1	44	1
英語音声学	56	2	56	1
日本語	10	0	11	0
英語科教育法	17	1	24	1
小学校英語	1	1	10	4

2009 年度：大学英語教科書協会. (2009). Online. Internet. April 23, 2009.

2019 年度：大学英語教科書協会. (2019). Online. Internet. January 15, 2020.

## 引用文献

江利川春雄.「指導要領から見た授業の変化と展望」『英語教育』. 56. 7 (2007) : 10-13.

…『日本人は英語をどう学んできたか』. 東京：研究社, 2009.

伊藤聡子. 「文学テキスト使用の見直し」『アカデミア』103 (2018) : 221-40.

国立教育政策研究所. <<https://www.nier.go.jp>>

大学英語教科書協会. <<http://www.daieikyo.jp/aetp/>>

高橋和子.『日本の英語教育における文学教材の可能性』. 東京：ひつじ書房, 2015.

日本英文学会（関東支部）編.『教室の英文学』. 東京：研究社, 2017.

細川裕子.『ドラキュラ リトルド版』. 東京：英宝社, 2019.

「目で見る英語教育」『現代英語教育』. 30. 13 (1994) : 102.

渡部昇一.『青春の読書』. 東京：WAC, 2015.

Council for Cultural Co-operation Education Committee Modern Language Division. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

Miall, David S. and Don Kuiken. “What is Literariness? Three Components of Literary Reading” *Discourse Processes*. 28.2 (1999): 121-38.

Richard, Jack C. and Richrad W. Schmidt. *Longman Dictionary of Language Teaching and Applied Linguistics*. NY: Routledge, 2002.



Stoker, Bram. John Paul Riquelme ed. *Dracula*. London: Palgrave, 2002.